

平成 30 年度第 1 回三重県新エネルギービジョン推進会議議事概要

1. 日時 平成 30 年 9 月 7 日（金）13：30～16：30
2. 場所 アスト津 4 階会議室 1（津市羽所町 700 番地）
3. 出席者 委員 16 名のうち、13 名出席（別記 1）
4. 会議の概要

平成 30 年 9 月 7 日（金）に平成 30 年度第 1 回三重県新エネルギービジョン推進会議を開催し、新エネルギー施策に関する意見交換を行いました。

また、本田技研工業（株）、東芝エネルギーシステムズ（株）、富士通（株）より革新的なエネルギー高度利用技術に関する講演を行っていただきました。

5. 主な意見

(1) 三重県新エネルギービジョンの取り組みについて

(委員) 木曾岬メガソーラーの取り組みによる産業やビジネスへの波及効果はあるのか。

(事務局) 太陽光発電事業以外の事業に波及することはなかなか難しいが、保守などで雇用が生まれることはあると思う。

(委員) 資料 1 の P5「省エネ推進体制の構築」について、省エネルギーの対象は家庭用か事業用か。

(事務局) 中小企業の省エネルギーへの取り組みを支援している。

(委員) 中小企業が省エネルギーについて支援してほしいという要望はたくさんあるので良いと思う。ただし、事業者にも家庭や暮らしがあるので、暮らしのなかの省エネルギーも大切にしていきたい。具体的な事例紹介といった普及啓発が必要だと考える。

(委員) 今回の台風災害で 10 時間程度の停電があった。再生可能エネルギーの追求はとても重要であるが、安定的な供給となると火力発電に頼るということになってしまう。再生可能エネルギーを推進しながらも安定的な供給を行うにはどうすれば良いか。

(事務局) 再生可能エネルギーを主力電源としていくうえでの課題と認識している。太陽光発電がわかりやすい例だが、昼は発電するが夜は発電できない。そのため電気を貯める技術は欠かせない。

(2) 講演に対する意見

- (委員) 東芝の講演について、水素製造装置で水素を生み出すと酸素も発生するが、その用途はあるのか。
- (講師) タンクに溜めているが、用途がなく、満タンになると放出している。医療用として利用という発想はあるが、法的に認められていない状況である。
- (委員) 本田技研工業のプレゼンに未来を感じた。電気自動車が増えれば夢が広がる。みんながつながることで発電所変わりになる。みんなでつなぐことで地域の活性化にもなるのではないか。
- (委員) 燃料電池自動車の走行距離は400kmだが、津市での水素ステーションの営業は週に2日しかないため、1週間の走行計画をしっかりと立てなければならず、運用が難しい。水素ステーションの導入は、メーカー主導のものなのか、行政も一緒になって整備するものなのか。
- (事務局) 移動式水素ステーションについては、設置に高額な費用が必要なため、三重県単独では難しい。

(3) 全体を通しての意見交換

- (委員) 北海道の停電の様子を映像で見て、エネルギーが身近なものだということを実感した。「防災の日常化」が三重県で取り組まれているが、エネルギーの部分でも、本田技研工業の講演にあった「家産家消」という言葉を日常化させて意識づけしていかないといけないと感じた。太陽光発電に関しても、台風21号によりパネルが飛ばされたり、感電するといった情報が流れているが、問題が生じたから駄目と決めつけるのではなく、どうすれば正常に使用できるのか、どうすれば家産家消が実現するのかということに取り組んでいくことが重要である。
- (委員) 本田技研工業が提供する「家産家消」関連製品の価格はどう考えているか。
- (委員) 一般消費者の方々から見れば、決して安価なものではないが、電動車の普及と共に落ち着くものと考えている。日本は欧米に比べて再生可能エネルギーを活用したビジネス展開が遅れており、国や自治体には規制緩和を是非お願いしたい。

(委員) 気象キャスターとして、連日災害に備えてほしいといった報道を行っている。大規模な停電や災害が起こると、人はエネルギーの大切さに気付く。身近に感じている今こそエネルギーの大切さを訴えるきっかけになると考えている。気象庁が災害の一つと認めている猛暑について、「私たちの暮らしと地球温暖化」というテーマで小学校への出前授業を行っており、異常気象を伝えながらエネルギーの大切さを伝えたい。悲観的にならず、本日の会議で得た情報を子供たちに伝えたい。

(座長) 広報は非常に大事である。三重県でも広報に努めていただきたい。

(委員) 電力の自由化が進められているが、現在は電力が余っているように感じる。また、以前のように節電という言葉もあまり聞かなくなった。このことについて、どのようにお考えか。また、石油価格の乱高下は何とか調節できないものか。

(委員) 原油価格の予測は困難であり、燃料費を含めたコストをいかに中長期的に下げていくかが大切と考える。

電力については、FIT法で太陽光発電などの再生可能エネルギーの導入が増加したことなども貢献し、現在は計画停電を行っていた頃のようなひっ迫した状況ではない。

なお、バイオマス発電では、パーム油を使用するバイオマス発電事業の認定申請が増加しており、国内で必要となるパーム油が世界のパーム油の生産量を上回るような勢いである。食糧としても使用できるパーム油を海外から輸入し、燃料にするのはいかがなものかとの意見もあり、検討が必要である。

(委員) 本田技研工業のように身近な生活における活用事例を紹介していただくと再生可能エネルギーの活用の価値が分かりやすい。蓄電設備は高価だが、身近な場所で蓄電できるようになれば良いと思う。多気町において、小水力発電による蓄電を行い、農業に利用している。スマート農業という考え方の中で、再生可能エネルギーを活用した水の管理も考えられるのではないか。

(座長) 再生可能エネルギーを身近に感じるということはとても大事なことである。富士通の講演であったSDGsのように、マクロな視点でものを考えると、身近さからは乖離する。身近に起こることとの両方を常に意識すること大切である。水力発電の話題は少なかったが、

水が流れていけばエネルギーになり、エネルギーがあればとことん使うことが大切である。コスト的な問題はあるが、資源を最後まで有効利用することを日常生活の中で意識すること大切である。

(委員) GDPとCO₂のデカップリングとは、GDPが上昇すると通常は増えるCO₂が反対に減ることであるが、関東、東海、関西を分析したところ、デカップリングが生じているのは東海地方だけで、経済成長していても低炭素であることが分かった。エネルギー利用における脱炭素、省エネルギーが進んでおり、特に進んでいるのが三重県であった。本日の講演で感じたことは、講演された企業がいずれも三重県内に事業所を持ち、CO₂の排出を抑えつつ先進的な取り組みを行っているということである。三重県は、こうした取り組みを推進し、地域の経済成長を目指していけるのではないか。

(委員) 再生可能エネルギーが普及してきたことは間違いない。三重県のビジョンも加速していけば良いと思う。ただし、一つの企業だけでは再生可能エネルギーの導入促進は難しく、新しい概念を全体で共有しないと普及していかない。三重県には、積極的に新しい視点を取り入れていただきたい。

(委員) 地産地消や家産家消は、概念的にはみなさん大賛成だと思うが、コストが高いイメージがある。それをクリアしていくために、イニシャルコストやランニングコストに対する補助金などを利用し、地域において再生可能エネルギーを起点とするキャッシュフローを創出してもらいたい。三重県の取組の中で売電収益を地元で役立てるということが紹介されているが、一回限りではなく地域でキャッシュフローの好循環ができるとよい。

本年度小型風力発電の買取価格を大幅に下げたことから、昨年度北海道で4000件の駆け込みの認定申請があった。発電事業者や開発事業者、製造業者の多くが北海道外の事業者であるため、売電収益をはじめ利益が道外に持って行かれてしまう。FIT法は電気料金に上乗せされ、国民に負担していただいているものであり、出来れば地元で還元されるべきである。

四国では、売電収益で一般家庭の再エネ導入や森林管理を支援するなど、再生可能エネルギーの売電収益を起点とするキャッシュ

フローが創られている。三重県もこうした取組を参考にさせていただきたい。

(別記1) 平成30年度第1回三重県新エネルギービジョン推進会議出席者名簿

氏名	役職名	備考
加川 大樹	本田技研工業(株) ビジネス開発統括部 エネルギービジネス開発部 担当部長	
先浦 宏紀	(株)三十三総研 総務部長兼調査部主席研究員	
高橋 幸照	水土里ネット立梅用水 事務局長	
多森 成子	三重テレビ放送気象キャスター、気象予報士	
辻 保彦	松阪木質バイオマス熱利用協同組合 理事長	
◎手塚 哲央	京都大学大学院 エネルギー科学研究科 教授	
○並河 良一	帝京大学大学院経済学研究科 教授	
野間 毅	東芝インフラシステムズ(株) 事業開発センター 総合エンジニアリング部 主幹	
福澤 紳一	(株)百五銀行 地域創生部長	
藤田 真人	富士通(株)三重支店長	
前田 世利子	伊勢おはらい町会議 会長	
矢口 芳枝	(一般社団法人)四日市大学エネルギー環境教育研究会 副会長兼事務局長	
柳原 和男	中部経済産業局 資源エネルギー環境部 エネルギー対策課長	

※敬称略 五十音順、◎座長、○副座長